

函館元町カトリック教会の復原研究

Keywords

カトリック教会 メルメ・カション 木田保造
函館大火 復原 リブ・ヴォールト天井

1. はじめに

1.1 研究目的

北海道函館市に現存する元町カトリック教会(写真1)は、日本におけるカトリック教の布教において古い歴史を有しているが、重要伝統建造物群保存地区の伝統建造物という扱いでしかない。

本研究では函館市に同じく現存し、国の重要文化財にも指定されている「函館ハリストス正教会」と同様の評価を受けたいという依頼のもと、重要文化財に指定されるための一端を担うという目的で、教会の編年を明らかにしていく。

そのため教会が建てられた当初の姿をAutoCADを使って三次元復原する。

1.2 研究方法

- 1) 元町カトリック教会の実測調査を行う。
- 2) 元町カトリック教会の実測図面や建設当時の写真、現建物の痕跡から三次元復原する。

1.3 実測調査

函館元町カトリック教会

調査日：2016/8/2~2016/8/5

所在地：北海道函館市元町15-30

2. 元町カトリック教会について

2.1 元町カトリック教会沿革

竣工：1924(大正13)年

設計者：不明

構造：煉瓦造モルタル(聖堂)

鉄筋コンクリート造(鐘楼)

元町カトリック教会は、1859(安政6)年来日したフランス宣教会のメルメ・カション師が寄寓した称名寺という、現在の弥生町にあった寺院内に建てた住居に礼拝室を設けたものが始まりであると考えられている。その後1867(慶應3)年に現在の元町に正式な教会堂建築として、木造による教会堂が建設された。

しかし1907(明治40)年の函館大火により教会が焼失。1910(明治43)年に煉瓦造のネオ・ゴシック様式で再建される。(写真2)

だが、1921(大正10)年に再び起こった大火により煉瓦造の外壁部分を残し焼失した。

その後、1924(大正13)年に木田保造という人物により、残存した外壁部分をそのままに利用し再建された。

その後様々な改築・増築をした結果が現在の元町カトリック教会である。

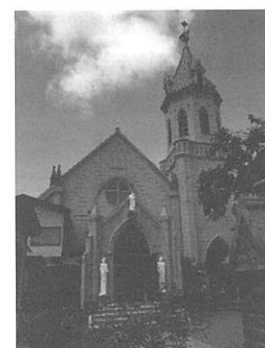


写真1 元町教会
現在外観

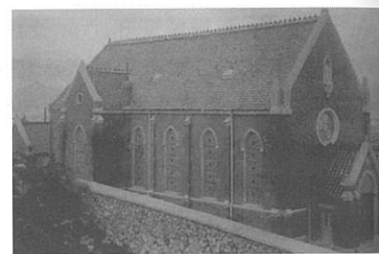


写真2 元町教会
建設当初外観

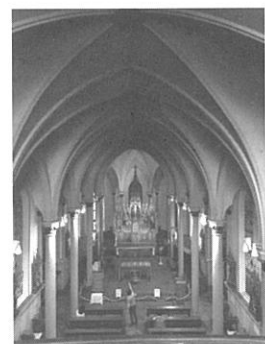


写真3 元町教会内観

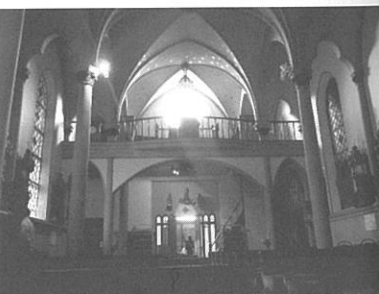


写真4 元町教会楽廊

2.2 メルメ・カション

1859年来日したメルメ・カション師は熱心に日本で活動を行っており、日本語が堪能で、自らアイヌ語を学びながら周囲の人々にフランス語を教えるなど函館の人からは人気のある宣教師であった。

当時の日本ではいまだに皮膚病などが蔓延して衛生状況が悪く、治療法もまじない的なものが多いことを危惧し、函館に病院を建設しようと活動をしていたが、医師の募集が難しくかつ諸外国との政治的な問題から、ロシアが先に病院を建てたため、メルメ・カション師の病院建設は実現せずに帰国している。¹⁾



AK13100 御福 翔

2.3 現在の元町カトリック教会

現在の元町カトリック教会の南側には「マリア館」という教会関係者の控室などに使用されているものが増設されている。かつてはこのマリア館と教会をつなぐ部分が教会への出入り口として使用されていたと思われる。その為、現在では鐘楼が教会への出入り口として使用されている。

小屋組は木造でリブ・ヴォールト天井の頂点で、リブを束ねるキングポストが陸梁から吊るされる形となっている。(写真5参照)

三廊式で周歩廊や翼廊があり、主廊に対し側廊が非常に狭くなっている。(図2参照)

教会奥には香部屋と通じているが、かつては小聖堂として使われていたと思われる。

教会の周囲には物置部屋などいくつかの増築が施されており、十字型の平面形式ではあるが、周囲からはその形が確認できなくなっている。(写真6参照)

水色の天井は1977年頃に塗られたものであり、当初は白色であった。

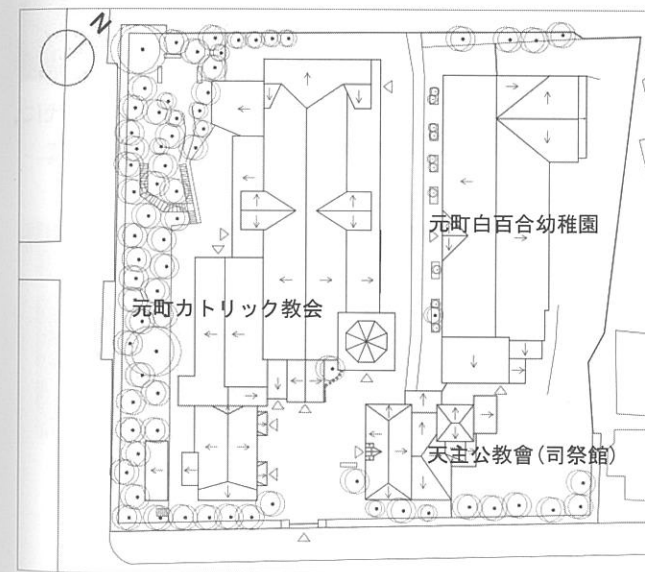


図1 元町カトリック教会 配置図

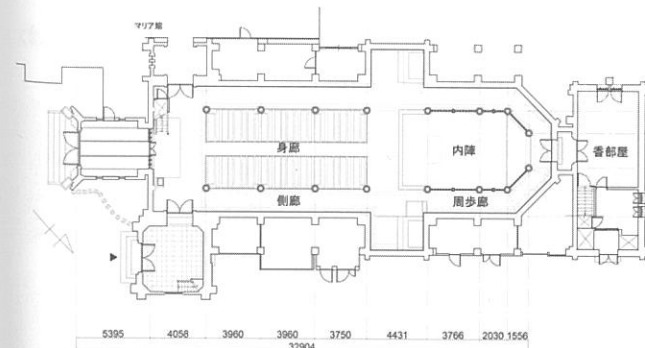


図2 元町カトリック教会 現状平面図

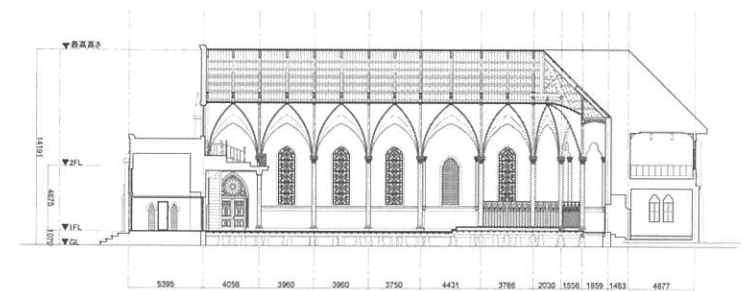


図3 元町カトリック教会 現状桁行断面図



写真5 元町教会屋根裏



写真6 元町教会航空写真

3. 元町カトリック教会の変遷

3.1 元町カトリック教会変遷のまとめ

表1 煉瓦造で建設されてからの元町カトリック教会年表

年代	備考
1910年	元町教会竣工
1921年	函館大火により消失
1924年	木田保造により再建、このとき鐘楼追加、初期の玄関部撤去、南側に新たな玄関部増築、小聖堂の屋根を陸屋根に変更
1925年	天主公教会(司祭館)建設 この間に小聖堂を2階建てに増築。
1945年	函館空襲、教会の一部損傷?
1950年	島田実神父、演奏会の収益、並びに進駐軍の援助金から椅子座式に変更。また2階式の楽廊とオルガン設置 この間に正面のステンドグラスが塞がれる
1955年	正面集合写真(写真11) この間に修復される?
1959年	外観写真(写真12)
1961年	元町白百合幼稚園開設
1972年	鐘楼修築、物置など増設工事。尖塔に雄鳥設置。この時マリア館を増築か?
1977年頃	教会内部の天井を水色、壁面を橙色に変更
1990年	モリス・ウィンダル神父が在任中、
2005年	壁面を白色に戻す

元町カトリック教会の年表を表1にまとめる。煉瓦造の教会が竣工したのは1910年とされ、設計者については詳しくわかっていない。

このとき司祭であったアレクサンドル・ベルリオーズ

神父は長期間欧州で募金活動を行い、それらを教会の建設などに使用されている。

前述してある通り、1921年には函館市東川町から出火した大規模な火災により、煉瓦壁部分を残して焼失してしまっている。

その後、1924年に木田保造により煉瓦壁をそのまま利用して教会を再建している。

木田保造が起用された理由としては、当時火に強い材料としてコンクリートに注目が集まっている中、初の鉄筋コンクリート造の寺院となる「東本願寺函館別院」を建設するなど、鉄筋コンクリート造の建物の建設に関して評価されていたためと思われる。

このときの教会に施された変更点としては、教会正面に突出していた玄関部の撤去、それに伴い新しい玄関部の増築、鐘楼の増設とこのとき小聖堂(現在の香部屋)の屋根を切妻屋根だったものから陸屋根に変更したなどが推察される。(写真7)

また教会も過去のもをそのまま再建しているのではなく、柱頭の意匠などが多少異なる。

特に過去の写真(写真8)などから天井の形状が異なるため、現在の教会の小屋組は再建される際に、設計しなおされたものと考えられる。

またこのときもペルリオーズ神父は教会再建の費用を集めるため、14ヶ月以上アメリカで募金活動を行っている。

その後、1940年代までの間に香部屋を2階建てに改築されたことが、米軍による戦後の航空写真(写真9)より推察される。

当時の図面から1階は小聖堂、2階は香部屋として使われていたことが推察される。

また戦時中の空襲により、ある程度ながら損傷していたことが写真より見て取れる。

そして1950年には当時の司祭であった島田 実神父により楽廊の設置と、信者の席を畳の床座式から椅子座式に変更している。(写真10)

これらの費用は、島田神父がテノール歌手の奥田良三との演奏会を開いた際の収益と進駐軍からの援助金などが使われた。

また1924年に再建された後、教会正面にはステンドグラスがはめてあったが、1950年の改築時に取り外されてしまったと思われる。(写真11)

その後1972年、第27代司祭、フィリップ・グロード神父により教会周囲に物置として増築がされた。

同時に現在見られるような突出した玄関部と、マリア館を増築したと思われる。

またこのとき小聖堂は香部屋として用途変更されたと思われる。

フィリップ神父は他にも独断で教会の天井を水色に塗

装し、さらに教会内部の壁面を橙色に塗装している。

現在天井に見られる水色や橙色はその時の名残である。これらに関して、信者からも疑問視する声もあったため、第29代司祭、モリス・ウィンダル神父により元々の色であった白色に戻されたが、費用の問題で天井までは白色に塗られなかった。²⁾



写真7(左)

1924~1925年の元町教会

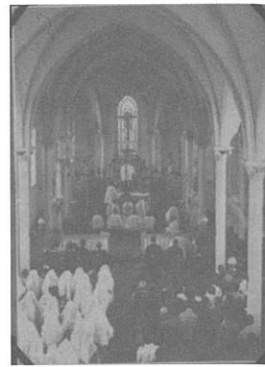


写真8(右)

焼失前の元町教会内観



写真9 戦後航空写真



写真10 聖歌台の時代に、撮られた写真

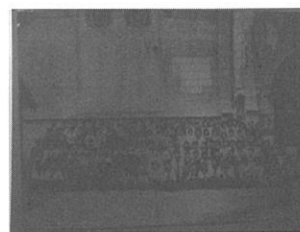


写真11 教会正面写真
(1955年ごろ)

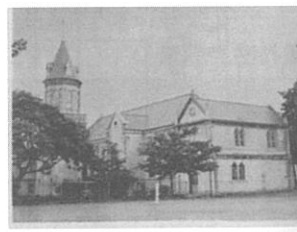


写真12 教会北西側
(1959年ごろ)

3.2 1924年 木田保造による再建築

2016年12月14日、木田保造により再建された際に使用されたと思われる平面図が発見された。それから1924年時の元町カトリック教会の姿が判明した。(図4)

同時に小聖堂に二階建てに増築する際の計画案と思われる図面も発見された。(図5)

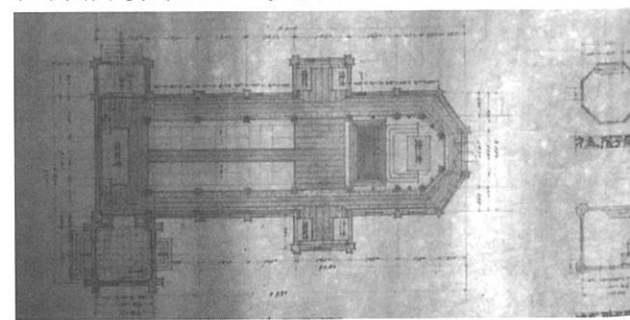


図4 元町カトリック教会平面図(1924年再建時)

図4の図面から現在のマリア館との通路は本来教会への出入り口として用いられていたことがわかる。

また楽廊が設置される前は簡易の聖歌台を使用していたことが窺える。

発見された香部屋増築計画案と現在の香部屋はいくつか異なる点はあるものの、外観上大きな差異はないため現在の香部屋の素案となつたものと考えられる。

3.3 1910年の元町カトリック教会

1910年の建設当初の元町カトリック教会の図面、並びにAutoCADで3次元復原したものを下記に載せる。

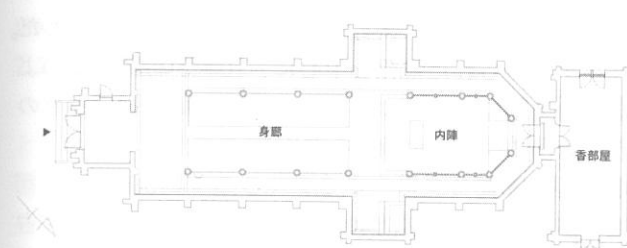


図6 元町カトリック教会 建設当初平面図

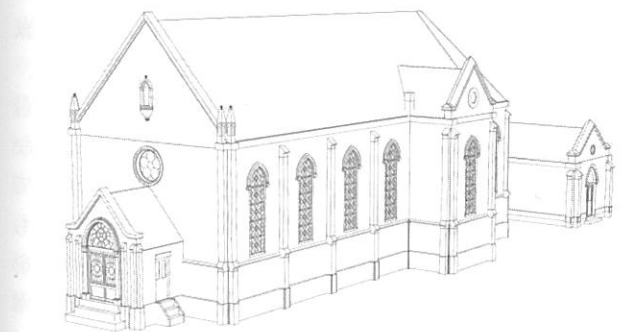


図7 元町カトリック教会 当初復原図

4.函館の煉瓦造建築について

4.1 函館の煉瓦寸法について

元町カトリック教会のある函館市西部地区(入船町、弁天町、弥生町、船見町、大町、末広町、元町、豊川町、大手町、宝来町、谷地頭町)には教会以外にも煉瓦造で建設された建造物がいくつもあるが、元町カトリック教会の煉瓦寸法とそれらの煉瓦寸法を比較しても大きな違いや、時代ごとの共通性は見られなかった。²⁾

これは調査範囲を北海道全域に広げても言えることで⁴⁾

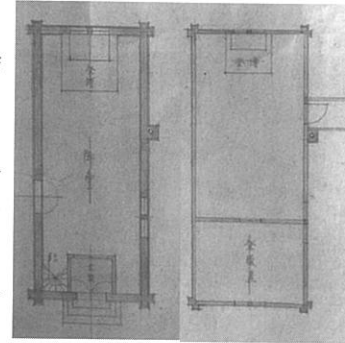


図5 香部屋増築計画案

使用する煉瓦の生産地は決まっておらず、また煉瓦寸法の規格もなかった、あるいは規格があっても守られていなかったと考えられるが、JIS規格が定められた後も以前の煉瓦が生産され続けられたり、後の時代になって損傷した部分を修理したものも多いため断言できるものではないという事を付け加えておく。

4.2 函館ハリストス正教会との比較

表2の通り、煉瓦寸法に関しては元町カトリック教会には特徴的な部分は見受けられないが、「函館ハリストス正教会」の煉瓦は他の煉瓦造建造物のものより少し大きいことが見て取れる。

これは函館ハリストス正教会は内法寸法を優先的に決定していることが影響していると考えられる。

実際、聖所には2尺9寸幅のゴザ10枚が敷き詰められるような寸法で建設されていることが「函館ハリストス正教会復活聖堂保存修理工事報告書」で述べられている。そのため煉瓦もそれに合わせて作られた可能性がある。

一方元町カトリック教会の煉瓦寸法は、ほかの建造物と比べても大きな特徴はなく、当時一般的に流通していた煉瓦を利用したものと考えられる。

5.まとめ

元町カトリック教会は幾度も焼失をしているが、そのたびに再建されており、特に1921年の焼失後、煉瓦造の外壁をそのまま利用し再建され、現在までその姿を残していることは注目すべき点である。

煉瓦寸法から察するに、函館ハリストス正教会のように教会用に生産された煉瓦ではなく流通しているものを使用していることから昔から標準的かつ実用的な教会であったことが窺える。しかし建設されて以降は神父たちによりそのとき必要なものを補うため何度も増改築していることから、教会の姿形に教会の変化の歴史を見ることができ、さらにそれらは元町周辺の信者やそれらを取り巻く状況の変化を表しているとも言えるため、元町でしか見られない貴重な教会であると言える。

ただグロード神父が行った周囲の物置部屋の増築は教会の外観上好ましくない増築であるといえるため、本研究で過去の姿を復原できたことは有意義な点であるといえる。

参考文献

- 1) 函館とカトリック
ジャン・ピエール・アインシアルト、トーマス高島源一郎
- 2) 函館のカトリック教会
<http://motomachi-ch.holy.jp/>
- 3) 技術史教育の教材研究(第2報)函館市西部地区における煉瓦建造物に関して 井上 平治、三浦 俊一
- 4) 煉瓦造の遺構および煉瓦の実測と成分分析による生産地推定に関する基礎的研究
日本建築学会北海道支部研究報告書No. 74(2001年6月)